

【趣意書】

平成 22 年度の「高野山大学いのちのセミナー」は、「癒しと救い」を統一テーマに、医療やカウンセリングの現場と仏教・密教の対話の可能性を追究します。

平成 21 年度、高野山大学はスピリチュアルケアの宗教的・思想的背景を確かなものとするべく、仏教・密教を専門的に研究する本学スタッフを中心に「高野山大学いのちのセミナー」をスタートさせました。これは、平成 20 年度に実施しました「高野山大学スピリチュアルケアセミナー」の成果を継承しつつ、より広い視野からいのちの問題を考察することを目指したものでした。こうした流れを受け、今年度はとくに「癒しと救い」というテーマを設定して、セミナー全体の焦点を明確化したいと考えております。

あらためて言うまでもなく、「癒しと救い」は医療と宗教に共通する中心的課題です。身体やこころの痛み苦しむ人からその苦を取り除き、いのちの尊厳を守っていくことは、医療にとっても宗教にとっても、変らぬ課題であります。近代になって、人間の身体的構造に関する科学的知識の深化と結びついて、医学が飛躍的發展を遂げたことは、まことに、人類全体にとって喜ばしいことであります。

しかしながら近年、身体に対する治療行為が発達する一方で、こころに対するケアがなおざりにされてきたのではないかという反省も広がってきております。そのことは、さまざまなホリスティック医療や、ほかならぬスピリチュアルケアに対する昨今の関心の高まりの中に確かに認めることができます。人間は身体だけで生きているのではなく、こころを持った存在なのであり、「癒しと救い」はその両面に及ぶものでなければなりません。

とりわけ人間は、単に心を持つのみならず、みずからの死を意識し、死に向かういのちの意味を問わざるを得ない存在でもあります。死を前にした苦しみや生きる意味についての苦悩は、人間が人間であるかぎり消えることはありません。病の治療も、身体に対する治療と同時に、病を生きる人間のいのちの意味を救うものでなければなりません。そうした死生観にかかわる苦しみに対する「癒しと救い」には、苦悩の意味を考え、ときにはそれを受容するような人生の智慧が求められます。ここに、宗教が蓄えてきた叡智が生きる場面があると私たちは考えます。

こうした観点に立ち、本年度の「高野山大学いのちのセミナー」では、仏教・密教の思想やスピリチュアルケアの思想と、現場のニーズを照らし合わせ、現代社会が求める「癒しと救い」について考察を深めることを目指します。またそのことによって、いのちの危機に際して悩み考える人々にとって有用な参照対象としての、仏教・密教思想のアクチュアルな意義を明らかにしてまいります。